

灰色かび病 (*Botrytis cinerea*)



地際部の病徴



茎の中位部が枯死

【見分け方（被害と診断）】

葉、茎、蕾、花弁に発生し、低温多湿で発生しやすく、9月～5月に多発する。特に中心花が腐敗した場合やチップバーン（葉先枯れ）が発生した場合は被害を誘発し、開花期まで悪影響を与える。また、夜温の低下で花弁にシミがつく場合もあり、閉めきったハウスでは一晩で多発する場合もある。商品価値を下げ、採花量の減少を招くので、発生させない栽培管理が重要である。

【発生生態】

病原菌の生育適温は20℃前後とやや低温で、多湿条件下で多発する。湿度95%の条件が8～10時間続くと発病する。病原菌は、植物残さなどに生存しており、そこから分生胞子が飛散し感染する。秋冬期における保温のため密閉した多湿ハウスで発生しやすい。

病徴は、はじめ花弁に円形の小さな斑点が形成され、あめ色～灰白色の斑点がやがて淡紅色を帯びる。茎では灰褐色に変色し発病部より上が萎ちよう、枯死する。いずれの場合も病斑が進展すると病斑上に灰色のかびを生じるのが特徴である。